コヨーテが星座をつくる　　アメリカ

むかし、五ひきのおおかみの兄弟がいました。おおかみたちは、いっぴきのコヨーテといっしょに旅をしていました。そして、狩りをしてえものを手にいれたときには、かならずコヨーテにも分けてやりました。

ある晩のこと、コヨーテは、おおかみたちが空を見上げているのに気づきました。

「そこで何を見ているんだい」と、コヨーテは、一番上のおおかみに聞きました。

「いや、なんでもないよ」と、一番年上のおおかみは答えました。

つぎの晩、コヨーテは、おおかみたちが、また空を見上げているのに気づきました。そこで、二番目のおおかみに、

「そこで何を見ているんだい」とききました。二番目も答えようとしませんでした。

つぎの晩も、つぎの晩も同じでした。だれひとり、何を見ているのか、教えてくれませんでした。とうとう、末っ子のおおかみが、兄さんたちにいいました。

「ねえ、コヨーテに教えてやろうよ。ぼくたちのじゃまをしやしないよ」

そこで、五ひきのおおかみは、コヨーテにいいました。

「おれたちは、上にいる二頭の動物を見てるんだよ。あんな上じゃ、行けっこないけど」

コヨーテは、

「ふうん。行って、あいつらを見てこようよ」といいました。

「へえ、どうやってだい」

「かんたんさ。見てろよ」

コヨーテは、矢をたくさん集めてくると、空に向かって射はじめました。最初の矢が空につきささり、つぎの矢が最初の矢につきささりました。そんなふうにして、つぎつぎと矢がつながってささり、とうとう、地面にとどくはしごになりました。

「さあ、これでのぼれる」と、コヨーテはいいました。

まず、一番上のおおかみが、犬をつれてのぼっていきました。つづいて、あとの四ひきのおおかみがのぼり、それからコヨーテがつづきました。一日じゅうのぼりつづけ、夜になってものぼりつづけました。つぎの日ものぼり、つぎの日ものぼり、昼となく夜となく、のぼりつづけ、ついに空につきました。

おおかみたちは、地上から見上げていた二頭の動物をさがしました。それは、二頭の

灰色ぐまでした。コヨーテは、

「やつらに近づくんじゃないよ。ずたずたに引き裂かれてしまうぞ」といいました。

けれども、年下の二ひきのおおかみは、くまに向かって歩いて行きました。くまたちは何もしないで、座っておおかみたちを見ていました。そこで、二ひきのおおかみもそこに座ってくまを見ました。何事も起こらなかったので、一番上のおおかみが犬をつれて近づいて行き、あとの二ひきも続きました。そうやって、みんな座ってくまを見ました。

コヨーテは、用心して近づきませんでした。けれども、思いました。

「ああやって、みんなが座っているのは、なかなかいいながめだぞ。あれは、絵になってるな。地上のみんなが見るように、あいつらをそのままにしておこう」

コヨーテは、おおかみたちが降りてこられないように、矢を一本ずつはずしながら下に降りて行きました。そして、空に残してきたものを地上からながめて感心しました。

二頭の灰色ぐまと年下の二ひきのおおかみが、ひしゃくのコップの形に並び、三びきのおおかみがひしゃくの柄の形に並んでいます。この星たちは、のちに北斗七星と呼ばれました。

コヨーテは、もっとたくさんの星を、空に置きたくなりました。そこで、空いちめんに、絵になるようにくふうして星を置いて行きました。それから残った星を集めて、空を横切る大きな道を作りました。これは天の川です。

仕事が終わると、コヨーテは、ひばりを呼んでいいました。

「もしおれが死んだら、みんなに伝えておくれ。空を見上げて絵のように並んでいる星を見たら、それをやったのはこのおれだってね」

それで、今、ひばりはコヨーテの話を伝えているのです。

村上郁再話

資料『世界の太陽と月と星の民話』日本民話の会・外国民話研究会編訳